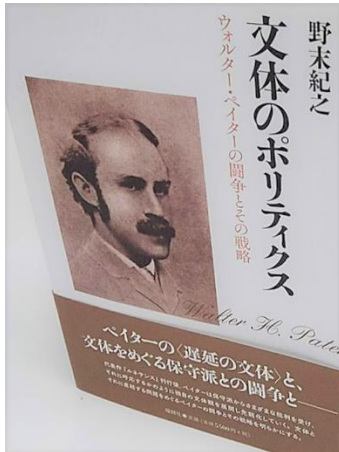


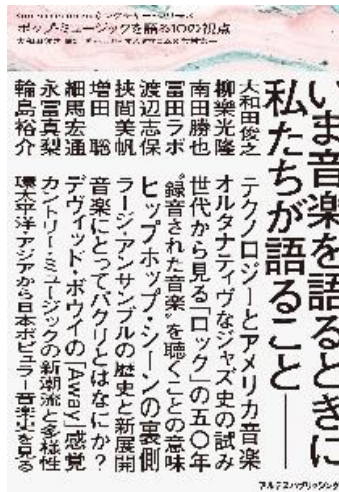
文化構想学科 先生方の書籍紹介

2019 年度に新設された文化構想学科の先生方に、ご自身の著書を紹介していただきました。
(大学院文学研究科文化構想学専攻は、2020 年度新設)



『文体のポリティクス——ウォルター・ペイターの闘争とその戦略』
野末紀之(表現文化コース・教授)、論創社、2018 年

拙著は、19 世紀後半の英国の文学者ウォルター・ペイターと当時の保守派との文体をめぐる闘争の内実を、ペイターの側からたどり、彼の戦略を詳細に分析したものだ。漱石・上田敏いらい、もっぱら唯美主義の美文家として賞賛/忌避されてきたペイターの文体と文体観がいかに戦略にみち挑戦的であったかをはじめて明確にした。



『〈music is music〉ポップ・ミュージックを語る 10 の視点』
大和田俊之(編著)、増田聡(表現文化コース・教授)、
アルテスパブリッシング、2020 年

本書は 2016 年から 18 年に連続開催されたレクチャーを基にした書籍で、研究者のみならず、ミュージシャンや評論家を含む 10 名の講義を収録しています。現在のポピュラー音楽研究がもつ視点の多様性を示す最新の成果です。私は「音楽における剽窃」についてお話ししています。音楽の「学術的な聴きかた」がわかる一冊。



『「二重国籍」詩人 野口米次郎』
堀まどか(アジア文化コース・准教授)、名古屋大学出版会、2012 年

バイリンガル詩人・野口米次郎の生涯を国際的文化思想潮流の中で明らかにしたもの。彼の「沈黙の美学」をうたった文学世界は、同時代の国内外の諸文学の動向とどんな関係にあったのか。「日本」を背負って俳句、芭蕉、能楽、日本美術などについて執筆し、英・米・印などで講演活動をした国際派日本人の今日的意義を問う。

※青字は、ご紹介いただいた先生



『現代演劇の地層 – フランス不条理劇生成の基盤を探る –』
小田中章浩(文化資源コース・教授)、ペリかん社、2010年

1950年代に登場し、後に「不条理劇」と呼ばれることになった劇作品は、19世紀末以降の西洋演劇における「ドラマの危機」の帰結であった。本書はこれらに先行するベルギーの劇作品を含め、両大戦間に活躍した作家の作品に基づいて、この仮説を検証する。全594頁。日本演劇学会第43回河竹賞受賞。



『月岡芳年伝 幕末明治のはざまに』
菅原真弓(文化資源コース・教授)、中央公論美術出版、2018年

「最後の浮世絵師」と称される月岡芳年。「江戸」に生まれ「東京」で歿した芳年は、幕末から明治という未曾有の大転換期に、絵師としてどのように向き合ったのか。残された資料や作品の精緻な博捜に基づき、客観的かつ立体的に芳年の生涯と画業を描き出す。」(出版社コピーより)。第69回芸術選奨文部科学大臣新人賞(評論等部門)受賞。



『大井川流域の自然・文化・観光』
安福恵美子・天野景太(文化資源コース・准教授)、あるむ、2016年

静岡県の大井川の流域に点在する自然／文化資源について豊富な現地調査を通じてビジュアルに紹介し、地域の観光創造について、担い手の役割に注目しながら考えます。大井川鐵道の蒸気機関車や秘境駅、昭和レトロ旅、カヌー体験、ダムと産業遺産、南アルプストレッキングなど「リバーサイド・ツーリズム」の魅力が満載！